

主 題：舌を制御する

聖書箇所：ヤコブの手紙 3章1－12節

私たちはこれまで「本物の信仰とはどのようなものか」を学んできました。ヤコブは、1章では本当の信仰者は試練を喜ぶことができると教えました。そして、1章の後半から2章にかけて、本当の信仰者はみことばを実践する人であると教えました。特に、2章に入って具体的に、隣人を愛することについてヤコブは教えました。ヤコブはこれらのみことばを通して私たちに、生きた本物の信仰には必ず行ないが伴うことを繰り返し私たちに教えています。生きた本物の信仰は私たちを変えます。私たちの心を変えます。ゆえに、私たちのことばにも影響を与えるのです。ことば、舌を制御するようになりなさい、それがこの3章で彼が私たちに教えることです。

1節を見るとこのように記されています。「私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。」とこのような命令によって3章は始まります。このみことばを見ると、その当時の様子をうかがい知ることができます。当時、賜物に全く関係なく、教師として働いていた人々や、また、教師になりたい人々がたくさんいたようです。そこでヤコブは、その人たちに対して警告を与えるのです。教師というのは大きな責任をもっているということを読者たちに教えるのです。一つは、生徒たちに対して大きな責任を負っていると言います。どのような責任でしょう？生徒に対して一番影響力をもっているのは教師です。良い影響であれ、悪い影響であれ、生徒に最も多くのことを与えることができるのが教師です。だから、ヤコブはそれゆえに、教師は自分のことばに注意しなければならないと言うのです。二つ目に、神に対する責任の大きさも指摘します。

「教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。」とあります。教師は当然、生徒たちよりもたくさんを知っているはずですが、ヤコブは、多く学んだ者はそれをより実践する責任があることを教えるのです。自らが率先してそれを実行して行くことが必要であると。ルカ12：48を見ると「…すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。」とイエスは教えておられます。たくさん受けた者はそれだけの責任を負うのです。たくさん知っている者はそれだけの責任があるのです。それを実践するという責任です。ヤコブはここでキリストのさばきの座に立ったとき、その点についてのさばきがあることを指摘しました。もちろん教師だけではありません。イエス・キリストを信じているすべての人が、キリストのさばきの座に立つのです。しかし、ここではテーマが教師ですから、教師がさばきの座に立ったとき、その人たちがどのようなことを教えたのか、みことばの真実を忠実に教えてきたのか、教えたことを自分自身も実践しようと努めてきたのか、そのようなことに関してさばきを受けるということを言っているのです。そのことによってヤコブは、教師が自分の責任をしっかりと自覚することによって、自分がその働きにふさわしいのかどうかを吟味するようと言います。なぜなら、最初に言ったように、教える賜物をもっていない人が教師の働きに就いていたからです。確かに、教師は人の前で話をするのですから注目を浴びます。そういう働きに就きたいと願う人がたくさんいたのです。だから、ヤコブは彼らに警告を為すのです。私たちにとって大切なことは自分の賜物を生かして主に仕えることです。もし、あなたが教える賜物をいただいているならその賜物を用いて主に仕えて行くことです。私たちはそれぞれに神からいただいた賜物に応じて主に仕えることが大切なのです。

また、この教えることで教師と生徒の関係を見たとき、日曜学校や学びの場で前に立って話す人たちだけを描いてしまいましたが、よく考えると、皆、信仰の先輩というのは教師なのです。新しく救われた人は先に救われた人を見て、その生き様、ことば、振る舞いから学ぼうとするのです。クリスチャンはどのように歩んで行くべきなのかを…。ですから、これは教師だけの責任で私には関係ないとは言えないのです。なぜなら、イエスの大命令というのは「弟子を作りなさい」でした。すなわち、私たちは福音を伝えて、その後みことばを伝えて行くのです。賜物の有る無しに関係なく皆教師なのです。私たちが日常生活においてみことばを伝えて行くというのは、すべてのクリスチャンたちに神が命じておられることです。そういう点からすれば、信仰の先輩である皆さんは後から続いて来る人たちの良い模範となっているかどうかです。また、家庭を見るなら、生徒である子どもにとって親は教師です。教師がどのように生きているのか、それを彼らは見て学んで行くのです。親である私たちは大きな責任を負っています。子どもたちにしっかりと教えて行かなければなりません。あなたの子どもも孫もあなたの大切な生徒たちです。彼らに大切なことを教えて行くというのは教師である私たち一人ひとりの大きな責任であることをしっかりと覚えたいものです。

また、余りに教師の責任と言われると難しくて未熟でいた方が良く、たくさん知るほどに責任が重く

なるのなら、余り知らないほうが責任も軽いのでは…？と、もしそのように思う人がいるなら、それは大きな間違いであることに気付かなければいけません。なぜなら、神があなたを救ってくださって、本当の信仰、本当の救いがあなたのうちにあるなら、あなたのうちに与えられた新しい思いは、成長して行きたいという思いであるはずです。私は余り成長したくない、幼子のままでいい、などと思う人は、もう一度、ヤコブが繰り返し私たちにチャレンジし続けてきたこと、自分の信仰を見直すことが必要です。本物の信仰はあなたを変えます。本物の信仰はあなたを生まれ変わらせるのです。本物の信仰はあなたの中に、私は神にあって成長したいという願いをくださるのです。もし、それがなければその信仰が本物かどうかを自ら吟味しなければいけません。

☆舌を制御することの大切さと難しさ

さて、この3章でヤコブが教えたかったことは、舌を制御することの大切さと難しさです。実際に、この読者たちの中にことばに関する問題が存在していました。ですから、もうすでに1：19で見たように、「…しかし、だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。」とヤコブは語っているのです。ことばの問題があったのです。そこで彼は舌を制御することの大切さ、その難しさを教えて行くのです。2節から見て行きますが、ここでヤコブは「霊的な人」について教えています。

1. 霊的な人とは、 2節

2節にその定義がなされています。「**私たちはみな、多くの点で失敗をするものです。もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。**」、「**完全な人です**」と記されています。どういう人をヤコブは描いていたのでしょうか？欠点や誤りのない完璧な人でしょうか？そうではないことがヤコブ自身のことばが明らかにしています。初めに「**私たちはみな、多くの点で失敗をするものです。**」とあります。この時制によれば「継続して失敗を繰り返す」という意味です。道徳的に失敗を繰り返す、道徳的に正しいことを必ずしもすべての点でできるわけではないということです。しかも「**私たちはみな、**」とあるように、クリスチャンみな、例外なくというのです。残念ながら私たちは罪を犯すのです。もちろん、この教えはみことばが私たちに教えてくれていることです。よくご存じのように、Iヨハネ1：8に「**もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにあります。**」とあります。同じ10節にも「**もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにあります。**」とあり、つまり、私は罪を犯していないというなら、あなたは嘘つきだということです。あなたのうちに罪があるというのは、あなた自身がよく分かっているはずだと言います。ですから、ここでヤコブが「欠点や誤りのない完璧な人」を指していたのではないことは明らかです。では、ヤコブが言う「完全な人」とはどういう人なのでしょう？それは霊的に成長した信仰のおとなです。この人は「**ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。**」と説明があります。ことばで失敗をしない、その人の口から出てくることばが神を喜ばせるようなもの、神が教えておられること、そのようなことを話す人のことです。そして、この時制もそのように継続して行くことを教えています。ヤコブはここで、イエスを信じたクリスチャンのうちに始まった神の働きを教えるのです。どのようなことでしょうか？イエスを信じて救いをいただいた者たちはことばにおいて変化が生まれてくるのです。それまでは、神に喜ばれることを話そうなどとは考えてもみななかったし、人の信仰を助けるのに役立つことを話そうとは思ってもみななかった、しかし、救いをいただいた者たちは神に喜ばれることを話したり、人々の信仰に役立つこと、成長に役立つことを話そうと変えられて行くのです。ヤコブが教えるのは、ことばにおいて汚れることを言わない、口からことばの罪を犯さない、そういう人というのは完全な人、成長を遂げた人、霊的なおとなであるということです。私たちはその途上にいます。まだまだ訓練されて行かなければいけない、清められていかなければいけません。イエスにお会いしたときに私たちは完全に聖いものとされます。罪を犯すことのないものとされます。それまで私たちはこの歩みを継続して行くのです。このように2節で「霊的な人」の定義を与えたヤコブは、3節から6節では「舌の働き」について教えています。

2. 舌の働き 3－6節

四つの働きがあります。

(1) 舌はからだ全体に影響を与える 3－5節

3－5節にそのことが記されています。「**3 馬を御するために、くつわをその口かけると、馬のからだ全体を引き回すことができます。4 また、船を見なさい。あのように大きな物が、強い風に押されているときでも、ごく小さなかじによって、かじを取る人の思いどおりの所へ持って行かれるのです。5 同様に、舌も小さな器官ですが、大きなことを言って誇るのです。ご覧なさい。あのように小さい火があのような大きい森を燃やします。**」、舌がからだ全体に影響を与えるのだということを、ヤコブは二つのたとえをもって話しています。馬のくつわのことと、船のかじのことです。私も初めて馬にくつわをはめて馬に乗ったときに一番驚いたのは、馬が自分の言う通りに動くということです。そして、船もかじによって思い通りに操ることが

できます。そのたとえを話した上で、5節に「同様に、舌も小さな器官ですが、大きなことを言って誇るのです。」と続きます。この「誇る」ということばを見ると自慢をすると思ってしまうのですが、この話の文脈を見たとき、話の流れは小さいものが全体に影響を与えるということ、小さなものに大きな力が存在するというのを教えてきています。ですから、ここでヤコブが言うことは、舌もくつわやかじと同じように、からだの中では非常に小さな器官だけれど、大きな力、影響力をもっているということです。たとえば、空しいことですが自分のことを人の前で誇ったことを思い出してください。後で空しくなります。人を中傷したときなどどうですか？後で憂鬱になって自己嫌悪に陥ります。では、人を励ますことはどうでしょう？人を励ますと心は喜びで満たされます。賛美をしたときも同じです。舌は小さな器官です。しかし、そこから出てくることによってからだ全体に大きな影響を与えるのです。正しいことが出てくれば正しい影響を受けますが、悪いことが出てくると悪い影響を受けます。5節に「**ご覧なさい。**」ということばがあります。ヤコブがこのように記したのは、次に言うことが大切だと読者に知らせるためです。これから言うことに耳を傾けなさいと言うのです。何を言いたかったのでしょうか？「**あのように小さい火があのような大きい森を燃やします。**」ということです。私たちもよく知っているように、1本のたばこのポイ捨てから森全体が燃えてしまったということがあります。そのように、小さな器官である舌が発することばが大きな影響をもたらしってしまうということです。それほど危険に満ちたものだから、注意するべきだとヤコブは言っているのです。

(2) 舌はからだ全体を汚す 6節

「**6 舌は火であり、不義の世界です。**」とあります。不義の世界、ヤコブが教えるのは、罪に染まったこの世界の罪、その汚れ、そのすべてが舌には含まれているということです。ソロモンはこのように言いました。箴言15：1－2「**柔らかな答えは憤りを静める。しかし激しいことばは怒りを引き起こす。2 知恵のある者の舌は知識をよく用い、愚かな者の口は愚かさを吐き出す。**」、また、15：28には「**正しい者の心は、どう答えるかを思い巡らす。悪者の口は悪を吐き出す。**」とあります。舌は様々な悪に満たされているのです。同時に「**舌は私たちの器官の一つですが、からだ全体を汚し、**」と言っています。制御されていない舌はその人を道徳的に汚して行きます。この「汚す」ということばは、新約聖書の中ではこの箇所と「ユダの手紙」23節にしか出てこないことばです。ユダ23には「**…肉によって汚されたその下着さえも忌みきらいなさい。**」とあり、6節は「**からだ全体を汚し、**」です。どちらも舌のなすわざ、行ないです。舌がこのようなことを行なうというのです。舌はその人の行動にまで影響を与えます。イエスがマタイの福音書15章でこのようなことを言われました。15：11「**口にはいる物は人を汚しません。しかし、口から出るもの、これが人を汚します。**」、15：18－19「**しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。19 悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。**」。口から出てくるのは、実は心がそのような汚れているからだと言うのです。ですから、私たちは制御されていない、コントロールできていない、言いたいことを言っているそのような舌を見るときに、その舌がまさに汚れた心から出てきていることを覚えるのです。

(3) 周りに悪い影響を与える 6節

「**人生の車輪を焼き、**」、この車輪というのは、ある人は人生を車輪と見なしているのだと言います。誕生から死まで継続して周り続けるからと。ある人はこれは日々の生活を車輪と見なしたのだ、人生とは日々の仕事の継続した繰り返しであるからと言います。しかし、ヤコブがここで言うことは、舌がどれほど大きな影響を及ぼすかということです。車輪を頭の中で描いて見てください。車軸があって、車軸が燃えるとその火は車輪の外側に向かって広がって行きます。そのことを言っているのです。つまり、私たちが舌をしっかり制御していないと、そこからどんどん外側に向かって悪い影響を及ぼしてしまうと言うのです。周りに悪い影響を与えることになると言うのです。私たちのことばが悪い影響を及ぼすこと、ソロモンは箴言16：28で「**ねじれ者は争いを巻き起こし、陰口をたたく者は親しい友を離れさせる。**」と言いました。彼が言うようにもし私たちが自分の舌をしっかり制御していないのであれば、それはまちがいにいろいろな方面に悪い影響を及ぼして行くのです。たとえば人間関係で、一番身近な家族との関係においても、親族や近所の人たち、学校や職場においても、もちろん教会においてもその交わりを破壊します。ソロモンはまた、26：20－21でこのように言います。「**たきぎがなければ火が消えるように、陰口をたたく者がなければ争いはやむ。21 おき火に炭を、火にたきぎをくべるように、争い好きな人は争いをかき立てる。**」と。もし私たちが非難したりうわさをしたり、陰口を言ったりと、そのようなことをするなら、それは必ず周りに悪い影響を及ぼして行きます。そのように神が警告されているのです。だから、私たちは自らの舌をしっかり制御することが必要なのです。何を言うのか注意することです。

(4) ゲヘナの火によって焼かれる 6節

「**そしてゲヘナの火によって焼かれます。**」とあります。ヤコブが言うことは、気をつけていないとあなたの舌はサタンの道具として用いられるということです。サタンがあなたの舌を用いると言うのです。

ゲヘナというところ、これは地獄を表わすことばです。終わることのない苦しまの場所をイエスはこのように呼ばれました。ヒノムの谷です。今もその場所が残っています。旧約の時代に人々はモレクという偶像に自分の子どもを捧げものとして捧げました。捧げものとして火で焼いたのです。そのようなことが行なわれた場所でした。ユダの王ヨシヤによってそれは禁止されました。その後、そこは忌み嫌われる所となりゴミの焼却場として使われるようになりました。エルサレムやその周辺のゴミが集められそこで燃やされています。そこは常に火がくすぶっていたのです。そこからイエスは永遠に終わることのない地獄の苦しみを表わすためにゲヘナということばが使われたのです。**「もし、あなたの手があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。不具の身でいのちにはいるほうが、両手そろっていてゲヘナの消えぬ火の中に落ち込むよりは、あなたにとってよいことです。そこでは、彼らを食ううじは、尽きることがなく、火は消えることはありません。」**とマルコ 9：43，48で話されています。

ゲヘナがそういう場所であることが分かりました。この地獄、永遠に尽きることのない苦しまの場所、それはサタンと悪霊たちのために備えられた場所です。そのことはマタイ 25：41でイエスが教えておられます。**「それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。』」**と。そうすると、この「ゲヘナの火によって焼かれる」とヤコブが言っているのは、舌の罪のさばきはそれにふさわしいということでしょうか？そうではありません。このゲヘナにふさわしいサタンや悪霊たちは今も働いているのです。そして、その地獄の火によって永遠に焼かれるサタンや悪霊たちの道具として、あなたの舌が用いられてはならないということを警告しているのです。地獄にふさわしいものたち、サタンや悪霊たちはあなたの舌を使おうとするのです。彼は嘘つきです。偽りを人々に吹聴して人々を惑わそうとします。人々が救いに来ないようにするのです。そうすると、私たちイエス・キリストを信じている者の舌をサタンが用いるときどうなるでしょう？周りにいるイエスを知らない人たちが私たちの会話を聞いて、そこに神を見ないのです。何の希望も見ないのです。そのようなことがあってはいけないのです。

ヤコブは非常にショッキングなことを教えました。私たちクリスチャンの口も注意していないといつの間にかサタンに使われてしまう可能性があるのです。だから、彼は繰り返して自らのことばに注意を払いなさいと言うのです。

そして、7－8節で「舌の力」について教えます。

3. 舌の力 7－8節

「7 どのような種類の獣も鳥も、はうものも海の生き物も、人類によって制せられるし、すでに制せられています。8 しかし、舌を制御することは、だれにもできません。それは少しもじっとしていない悪であり、死の毒に満ちています。」、舌の力についてヤコブは教えています。それはもう制御できないものであると言います。制御できるものとできないものとを対比しています。7節には制御できるものが記されています。それは自然界の生き物です。人間によって治めることができるし、それを治めていると言います。しかし、自分自身の舌は治めることができないと言うのです。**「舌を制御することは、だれにもできません。」**と、例外がないのです。どんなに意志が強くてもしできないことだと言っているのです。皆さんもうよくお分かりでしょう。どんなに頑張っても自分の口から悪いことばを発しないようにしようとしても、すぐに出てきてしまいます。どうしてもできない弱い者です。私たちの力には限界があることを教えるのです。それを考えるとき、私たちが自分の努力や自分の意志の力で自分を救おうなどということは不可能だということが分かります。私たちは自分の口も制御できないのに、どうして心を制御することができのでしょうか？神が望まれる聖いものにどうしてなることができるのでしょうか？どんなに頑張っても無理です。だから、神の助けが備えられたのです。神の救いが備えられたのです。そういうことを私たちが考えるなら、私たちのことばも希望がないわけではありません。神が変えて行ってくださるのです。そのことを私たちは2節で見たのです。神の働きはもう始まったのです。神は私たちのことばを変えて行こうとされます。そのような働きの中に私たちは居るのです。

8節をもう一度見ると、舌の力についてヤコブはこのようなことを加えます。**「それは少しもじっとしていない悪であり」と**、もう言うことを聞かない、治めようがないと言うのです。また、**「死の毒に満ちています。」**と言います。このときヤコブは詩篇 140：3のみことばを思い出していたのかも知れません。

「蛇のように、その舌を鋭くし、そのくちびるの下には、まむしの毒があります。」とあります。つまり、ヤコブは制御されていない舌というのは、ちょうど猛毒のように大きな害をもたらすのだと言います。口から出たうわさ、中傷、ゴシップは大きな痛みや悲しみ、そして、致命的な被害をもたらす可能性があるのです。うわさを流した人はそれで満足かもしれません。しかし、うわさされた人、その家族、うわさを聞かされた人を苦しめます。そのことによって毒がどんどん広がって行くように、教会の中に分裂が生まれてきたりするのです。毒にはなにも良いことはありません。ヤコブはもし私たちの口から悪いことばを出すなら間違いなく悪い影響をもたらすと言います。**「死の毒に満ちている」と**致命的なダメー

ジを与えてしまうのです。教会が分裂したと聞くと、必ずそのような問題が存在しています。私たちの群れにあっても、悪魔はそのようなことをしようとするのです。「あなたにだけ言うけれど…」とか「悪気は全然ないのだけど…」と、もしそのようなことを誰かが言うなら、私たちはその人を愛する者として、このように言わなければいけません。「申し訳ないけど、私はそのようなことは聞きたくありません」と。人のうわさや悪口は聞きたくないと…。私たち日本人には難しいことですが、それが必要です。そうしないとその人は気付かないかもしれません。そして、私たち自身、悪口を口から出してはいけなのです。人のうわさの発信源になってはいけなのです。私たちの口はそんなために神が清めてくださったのではないのです。ヤコブは私たちに、自分の言おうとすることが本当に神の前に喜ばれることかどうかを考えて話をするようにと言います。誰かに話すとき、自分が話すことがその人の信仰の成長に役立つことかを考えて話さないで。残念ながら、私たちはことばにおいて失敗を繰り返す者です。そして、私たちにそれが指摘されたときに、私たちはそのことを主の前にへりくだって悔い改めることです。

あのパウロでもそうしました。パウロは大祭司アナニヤに対して「**ああ、白く塗った壁。神があなたを打たれる。**」と非難しました。するとそばに立っていた者がパウロにこう言うのです。「**あなたは神の大祭司をのしるのか。**」と、パウロはこう言います。「**兄弟たち。私は彼が大祭司だとは知らなかった。確かに、『あなたの民の指導者を悪く言ってはいけぬ。』と書いてあります。**」と、自分の過ちを認めるのです。罪を犯さない人はいません。だから、個人として自分が罪を犯さないために、自分のことばにしっかり注意を払うことです。私の話すことが神に喜ばれるものかどうか、そして、人の悪口を言いたくなるとき、どうしてそのようなことを言いたがっているのか、自分の動機を吟味することです。間違いなくそこにあるのは罪です。それを主の前に告白することです。そして、もし兄弟姉妹がそのようなことを話しているなら、彼らを愛する者としてその間違いを指摘してあげなければいけません。そのようにして、一人ひとりがことばにおいて成長して行こうとするのです。

4. 舌への警告 9－12節

「**9 私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。10 賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。11 泉が甘い水と苦い水を同じ穴からわき上がらせるというようなことがあるでしょうか。12 私の兄弟たち。いちじくの木がオリーブの実をならせたり、ぶどうの木がいちじくの実をならせたりするようなことは、できることでしょうか。塩水が甘い水を出すこともできないことです。**」。何を警告しているのでしょうか？舌を制御しなさいということです。そのことをヤコブは繰り返しているのです。してはならないこと、それは「**のろい**」を口から出してはいけぬということです。そのことを教えるためにヤコブは三つの質問をしています。「**泉が甘い水と苦い水を同じ穴からわき上がらせるというようなことができるか**」と聞いています。答えは当然NOです。「**いちじくの木がオリーブの実をならせることができるか**」と、これもNOです。三つ目は「**ぶどうの木がいちじくの実をならせることができるか**」です。当然NOです。答えの分かりきった質問を三つしたのです。それはこのようなことは有り得ないということを強調するためです。そのことによってヤコブが言わんとしたことは、生まれ変わった本物の信仰者から神への賛美が出てくるのは当然だ、それはその人が救われた喜びを知っているからだということです。神への賛美ができるのは神によって救われた人だけです。なぜなら、救われた喜びを知らなければ心からの感謝ができるはずはありません。ヤコブが言いたいことは、その信者から神の嫌うのろいが出てくるのは有り得ないことだということです。現実には、残念ながらそれが出てくるのです。非現実的なことをヤコブが言っているのではないのです。彼が教えているのは、悪いことばがクリスチャンであるあなたの口から出てくることを、神はどれほど悲しんでおられることかということです。神は私たちをそのような罪の中から救い出してください、この口を神への賛美のために、神を称えるためだけに使いなさいと。しかし残念ながら、私たちがそのためだけに使えないのです。

今日私たちは大変重いことを教えられてきました。皆それぞれこのみことばによって責められるところがあると思います。でも、あなたが本当の救いをいただいているなら、あなたはこの厳しい教えの中にも希望を見出すのです。なぜでしょう？あなたを変えてくださる神の働きがあなたの中に為されているからです。神はあなたを変え続けていってくださいなのです。このことばにおいても神はあなたを変えていってくださいなのです。ですから、この主にあつて希望をもつのです。主のみわざを私たちは期待するのです。私たちの力では不可能なことを神が為してください、私たちを変えてくださる神に希望をおいて「主よ、私はあなたをいつも賛美できるような、あなたに喜ばれることをいつも語れるような、人に語るときはその人の信仰の徳を高めるようなことをいつも語れるような、そのような人物に私を変えてください、そして、あなたがそのように変えてくださることを信じます」と、そのような決心をもって今日から歩んでください。主はあなたのうちにみわざを為してください。

